

高ふは御ざり升れど是より口上を以て申上

奉り升先志何れも様益御機嫌克入らせ

られ恐悦至極ニ奉存升随ひ升て私義

大江戸八百八丁の御ひいき皆／＼御取立を以て

未若年ながら座頭相勤升るも全先祖の

余光何れも様の御蔭と心魂ニてつし有難く

存奉升扱去る天保十三年寅年中相別れ候

父海老蔵義追々多病と相成升との事故

何卒息才成内と一度面会致度と日比願ひ

をり升れど芝居興行に■なく既に八ヶ年

相成升る事■定る父の佛以前とかわり

いかゞと存升ればひたすらなつかしく候

ゆえ重縁にも候河原崎座本権之助へ

上板なしたきり相折升たり敷成程ねと

して親を思ふハ是孝道の■なれば

上板いたし升る様申呉れ升る故暫く

の御■を下し呉れ升る様偏ニ希上候

去る御ひいき様より御名残として歌舞

妓十八番之内伊達の七役勧進帳相

勤る様との御勸メに有難くハそんじ

升れど未熟不調法なる私■達が辞

退いたし升たるを■御勸メニよりおこが

ましくも右大役相勤御覧ニ入奉り升る

様に御ざり升海老蔵の佛とあしき声も

御見捨なく恐れ入れ升たる事ながら此度の上

坂に父の土産私の選別と思したれ相かわら

ずバ成まいと作台初日より賑々しく

御光来之程ひとえに希上弁